

## 論文の内容の要旨

論文題目 古代ギリシアにおけるドリス式建築の上部構造に関する  
研究史：700-404 B. C. E.

氏 名 川津 彩可

本研究は、小国分立の無数のポリスから成る古代ギリシア世界において、各地に散見されるドリス式の特徴をそなえた石造建築について、ポリス成立直後のアルカイック期からクラシック期にかけてのその上部構造に着目し、従来オーダー論と直接的に関連づけられがちであったウィトルウィウスの木造起源説を再検証しながら、ギリシア建築の広い範囲で用いられていた木材をはじめ、石造のドリス式建築における上部構造を構成した部材や素材の実態および空間機能の可能性を明らかにすることを目的とした。

研究の遂行にあたり本論全体を5章構成とし、第1章から第4章では、具体的にドリス式建築の上部構造に着目し、各章においてその構造と装飾に焦点をあてて上部構造の様々な側面を抽出することを通して、ドリス式の上部構造を成立させる部材や素材の実態、空間機能の側面について考察を行った。また第5章では、植民活動を介しながらも母市と植民都市とが緩やかな関係性を形成したポリス社会に関する考察を行う章として位置づけ、信仰・建設活動・住まいに関するケーススタディを通して、古代ギリシア人が重要視していた価値観を考察した。

第1章では、マグナ・グラエキアと本土ギリシアに広がるドリス式建築のエンタブラチュアを成す上部構造の特徴を抽出し、違いが生じている部分についてはどのような要因からその違いが生じている可能性があるかを提示することを目的としていた。そのために、はじめに神殿の最大スパンおよび内部階段について考察し、次に、本土ギリシアのアッティカ地域で発展した天井形式について考察をおこなった。これまで別々に議論が精緻化してきた最大スパンと内部階段とについては、一見、いずれの状況もひとつひとつは神殿の上部構造にかかわる空間機能自体とは直接的に関連づけられない情報にしか過ぎないように思われるが、スパンと内部階段双方の情報を改めて整理し直し、複合的に考察をおこなうことで、直接的な考古学的情報の乏しい神殿建築の上部構造内部における空間機能の観点に新たに光をあてようと試みた。

まず、アルカイック期からクラシック期（前6～4世紀半ば）にかけてのドリス式神殿の最大スパンに関しては、これまでも指摘されてきたように、マグナ・グラエキアでは本土ギリシアよりも神殿内陣に大スパンを架構する傾向にあった。この最大スパンと内部階段に着目しその特徴

と関係性をまとめたところ、その小屋裏空間を活用していたことを示す石造の内部階段について、階段室は神殿内陣の規模におおよそ比例して変化する傾向がみられた。また、階段は基本的には神殿平面の長手軸線と直交する方向に昇降するよう折返すものが構築され、神殿平面の長手軸線に対して平行方向に昇降することは一般的ではなかったと思われる。しかし、この、神殿平面の長手軸線に対して平行方向に昇降する階段を計画せざるを得なかったと考えられるパンの小さな神殿に関しては、その階段室の出入口の位置から、通常、マグナ・グラエキアの石造階段室が内陣の外側やプロナオス側からではなくナオス内部から出入りし利用されたことが一般的な慣例だったこともうかがえ、階段室や屋根裏空間が単なる点検や修理のために計画されたものではないと考えられる傍証のひとつとして、新たに指摘することができた。

次に、クラシック期のアッティカ地域におけるドリス式の周柱式神殿を対象とし、外部列柱廊空間を覆う天井架構について考察した。その結果、架構と天井種類、材料の間に関連性は見出されなかったが、天井の架構形式としては、対象遺構中他の全ての神殿とパルテノン神殿とは異なる形式の天井の架け方がなされていたことが判明した。このことから、アッティカ地域のドリス式の周柱式神殿において、パルテノン神殿の外部列柱廊の天井架構の特殊性を指摘することができた。また、この過程において、前5世紀に本土ギリシアのアッティカ地域で発達したこの石造格天井について、その現存する最古の石造の事例はマグナ・グラエキアの地のパエストゥム遺跡にて、実際の天井としてではなくペディメントの装飾として格間モチーフが出現していたこと、そして、本土ギリシアにおけるアテネのヘファイストス神殿の石造格天井がその祖型としての木製格天井の形式に直接的に由来する可能性がこれまで示唆されてきた点が確認された。

第2章では、ドリス式という概念からはいったん距離をおき、また、地域的には一気に古代ギリシア世界全体へと拡大するが、文字史料にみる建物木部と樹種との関係性を明らかにすることで、樹種を通してみた古代ギリシア人の上部構造への意識をさぐることを目的としていた。

建物上部の架構という意味において、屋根材と天井材に類似する材が用いられることが想定されたが、分類の結果、大きく分けると異なる樹種の木材が活用されていたことが指摘された。前者の屋根材には、柱や梁などにも用いられる強度のある構造材が使用され、一方の後者の天井材には、加工のしやすい比較的柔らかい樹種の木材が用いられていた。この後者の木材の使用は扉などにも共通して見ることができ、建物の室内空間はこれらの柔らかい樹種の木材に面的にとり囲まれていたようである。古代ギリシア人たちは屋根を構築する木材と天井を構成する木材とを分けて考えていたことがうかがえ、天井に関しては装飾的な特質を含み、それぞれの建築箇所に対して異なる樹種が用いられた傾向を見出すことができた。

第3章では、中世における古代建築の改変のされ方、中世ギリシアの人々の視点を通して、オリジナルの古代神殿の上部構造の特徴を抽出することを試みた。残存状況の良好なアテネのヘファイストス神殿の中世における改変について、特にその上部構造に着目しながら、建造時のどのような工夫が後の時代に活かされたかを考察した。ヘファイストス神殿における上部構造の

改変の造作に関する分析をおこなうことで、神殿の教会への改変時にどのような意図をもって工事がなされたかを検討し中世の改変者たちの視点を介して、古代建築の上部構造の中世の改変時における工夫や特徴から、古代建築の上部構造の特性を抽出することを目的としていた。なお、当該建築の格天井については第1章で確認されたように、これまで木造建築の石化の過程を直訳的にとどめている可能性が指摘されていた。

本章では以下の三点が明らかになった。まず、中世において内陣部分に構築されたコンクリートのヴォールトには排水路が設けられていたことから、教会への改築後はそのさらに上方を覆う古代のような建物全体を覆う屋根は設けられていなかったことが明らかとなった。また同時に、建物のペリスタイルに架かるかつての石造格天井は直接風雨にさらされていた状態、完全に雨水を防ぐことが可能であったかは疑問の余地があるものの、中世においては外周列柱廊上に架かる「屋根」としての役割を担っていたものと考えられる。二点目として、ヘファイストス神殿において、中世に設けられたヴォールトの高さと傾斜は、オリジナルのペディメントの形態を考慮に入れながら構築されたことが指摘された。三点目として、中世の改変においては、構造的強度の理由から、その他多くの天井梁がある中であえて、内陣上部を横切る内部エンタブラチュアと内部コーニスの上に設置されていた天井梁を選択し、その上に排水路が構築されたことが明らかとなった。

これら三点から、屋根架構の改変に着目し、中世において既存の神殿が教会へと改築される際には、オリジナルの建築の仕組みが巧みに活用されていたことが指摘され、このことから、周柱式の古代建築の上部構造が、その形態が大きく変化する後の中世の時代においても、上手く改変活用することを実現させられる素材・構法における特徴を有していたことが指摘された。

第4章では、ドリス式神殿と「トリグリフの祭壇」との関係から、石造建築の上部にめぐらされた装飾について、ポリス社会にとって信仰行為が不可欠であったことを念頭におきながら、木造建築の上部構造以外にもその起源がある可能性をさぐることを目的としていた。ドリス式建築の最大の特徴であり、また、ウィトルウィウスによる木造起源説の中核をなす部分である、石造建築のトリグリフ・メトープに焦点をあてた。この石造建築におけるトリグリフ・メトープの連続装飾が、木造建築の上部構造に必ずしも由来しない可能性も考慮しながら、地面にあたかも建物のフリーズがそのまま設置されているかのようにトリグリフ・メトープが配された構築物—トリグリフの祭壇—を対象として、トリグリフ・メトープが建物以外にもその起源をもとめられる可能性について考察した。

ポリス社会における習慣としての儀式を執り行う祭壇は、聖域を構成するために不可欠の要素であったものの、その研究においては1949年に至るまで包括的に類型化されずにあった経緯があり、その後、1970年代に一部の地域や祭壇の種類について類型化が図られた。そのような状況の中、ようやく近年、建築様式の起源を求める研究の中で、最初のドリス式に関して、ドリス式神殿がトリグリフの祭壇よりも先に出来上がったとは言いきれないのではないかとする見解も出され始めた。トリグリフの祭壇は古い事例としては、母市をコリントスとする植民都市ケル

キュラやシュラクサイ、また、コリントスの対岸に位置するペラホラなどで確認されており、コリントスでのドリス式の発展も指摘されている。

母市をコリントスとする植民都市ケルキュラには、前600年頃のものとするトリグリフの祭壇が現存する。トリグリフ・メトープの割付けを確認すると、長手と短手において、その割付け寸法に違いが見られた。この事実は、建物の柱位置に合わせてトリグリフ・メトープが配置されるべきとするウィトルウィウスが、柱を携えた建物全体構成の中で、細部のトリグリフ・メトープが柱間に応じて割付けられるものとする見解と矛盾が生じており、ドリス式建物の上部構造を構成するトリグリフ・メトープの起源が建物以外にもとめられる可能性を指摘した。

この章を通して、石造のドリス式建築の上部構造に関して、従来の木造起源説とは異なる由来やモチーフも存在した可能性が深まった。

第5章では、古代ギリシア文明の特徴としての植民都市の建設活動について扱った。最初に、ヘスティア信仰を軸にしながら植民活動と植民都市建設について論じ、続く3節を、全ギリシア的神域のデルフィにおける奉納ストア、アテネのケラメイコスにおける家族墓の石積み、ギリシア北部のアルギロスの住宅遺構を対象とした。

汎ギリシア的神域での神託を通じて、暮らしや住まいを司る炉の女神ヘスティアの象徴としての炎を介在させながら植民都市を建設し、相互に結びつきながら拡張した古代ギリシア世界であったが、乾燥した気候的特質をもつ文化圏の石造建築であっても、デルフィ神域のストア建築やアルギロスの住宅建築の事例からは雨水や排水に配慮した計画がとられていたことがうかがわれ、同時に、排水を意識した街路といった都市機能とも連動しながら個別の建物機能が計画されていたことがうかがわれた。アルギロスの住宅遺構については、舗床がないということを除き、バスタブの独特の配置や当該遺構の他の構成要素に関して、オリュントスの「キッチン・コンプレックス」の特徴との類似性が指摘された。また、家族墓のような市民にとって大切な構築物を造る際には、連続した墓域でありながらも各々独自の構法や素材が選択され、装飾的に表出する意匠上の工夫が丹念に凝らされていた。

以上の5章をもって、ポリス社会成立直後のアルカイック期からクラシック期にかけてマグナ・グラエキアと本土ギリシアに分布するドリス式建築の上部構造の特色を、ウィトルウィウス以来となえられてきた木造起源説に関する議論をふまえながら各章において抽出させることで、石造のドリス式建築の上部構造を成立させる部材や素材の実態や空間機能の特徴を明確化させた。